逆風のかなたに聞く平和の水音

中村哲医師の人生

平野靖雄

２０１９年１２月４日、アフガン（アフガニスタンの略称）で働く車上の中村哲医師への銃撃により、ほどなくして死亡が確認された事件ほど私にはショッキングな事件はなかった。自分の利益、安全を顧みることなく、用水路建設のために働く氏の努力が、現地急進派によってもたらされたと思われる思いがけない結末には呆然とさせるものがあった。いつも年末には話題となるノーベル平和賞に、今度こそ氏が推挙されることを願っていただけに、現実の国際社会の難しさが絡んでいる気がする。私は氏の死亡を機に、おぼろげであった氏の業績をきちんととらえ、我が人生を振り返り、氏が汲んでほしいと望む「人として最後まで守るべきものは何か」「尊ぶべきものは何か」（『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』（中村哲・澤地久枝著、岩波書店）を考えたいと思い、中村氏の著作を数冊読んだ。その中で前述書が一番多方面から氏の内面と業績に迫りうると思え、この本を中心に述べてみたい。従ってこの小論はささやかな読書感想文にしか過ぎないが、私には意義深いものだった。作家澤地氏の長年鍛えたジャーナリスト魂と用意周到な調査準備が問題の内面を鋭く抉っており、素晴らしい出来映えに心をゆすぶられた思いである。

中村哲医師は日本キリスト教海外医療協会からの誘いでアフガンに渡り、ハンセン病患者の治療にあたっていたが、次第に病気や貧困の根絶のためにはきれいな水の確保が第一だという考えにいたり、何もない砂漠に用水路を作る計画へと方向を転換していく。当然未経験の土木工学の基礎から学び始め、日本の用水路を研究し、ヒントを得て二十五キロメートルの用水路を作ることに着手するのだ。用水路建設によってうるおう大地に、住民が多くの穀物や野菜類を栽培し、次第に病気にかかる住民も減っていった成果に中村氏達は平和の喜びを見出していった。

しかし総じて考えれば氏の人生、特に後半生の三十五年間は誤解・偏見とのたたかいの人生だったと思えてならない。ソ連軍によるアフガンへの侵略、それに呼応する内戦、部族間の争いなどが続き、２００１年の９・１１の大事件が起きた。米英はアフガン無差別爆撃を開始し、アルカイダの討伐、極右タリバンの絶滅を目指して攻撃を大々的に開始し、国際連携による武力制圧をスタートさせた。泥沼の復讐劇が双方から企てられたのだ。しかし私たちの知識ではアルカイダもタリバンも呼び名は違っても同一のものだと思ってい

たのではないか。アラブ出身のアルカイダは都市に住む教養あるテロリストであり、田舎者のタリバンとは大きく異なるらしい。タリバンという言葉は旧タリバン政権のような極右政治団体の意味もあるが、マドラッサ（寺子屋のようなもの）で学ぶ生徒たちをも意味しているのだ。従って「タリバン兵を八十人殺した」という報道が実はマドラッサで学ぶ子供たちを全員殺したとか、結婚式に集まった地元民を殺害したということになり、この事実によりますますアメリカはアフガンの人々から恨み、憎しみを買ってしまうのだ。中村氏は講演や著書を通して、用水路建設とともにテロリスト攻撃とはどういうことか語り、私たち日本人の誤解を解こうとする。このような氏をタリバンの回し者のように理解していた日本人もいたことは十分に想像できる。

中村医師は二度国会に参考人として呼ばれている。２００１年10月衆議院のテロ対策特別措置法案審議に参加している。その時の空気はテロ絶滅の戦争に加わっていくのか、テロ容認か、二者択一を迫る審議であった。この国会では「自衛隊の派遣は有害無益」と語る中村参考人を揶揄し、やじる者もいたという。二度目は２００８年11月の参議院外交防衛委員会の参考人として陳述した。氏は言った。「干ばつとともに、いわゆるテロ戦争という名で行われる外国軍の空爆、これが治安悪化に非常な拍車をかけておるということは、私は是非伝える義務があると思います」。空爆によって家族を分断され、失っている現実を中村氏は用水路建設の中で見てきた。空爆が事態をさらに悪化させていると主張したかったのだ。氏の陳述に対して議員たちの否認、皮肉の空気を感じた後、中村氏はあわただしく、氏なくしては進展しないアフガンの用水路建設現場へと帰っていった。「故郷とはなにか、と私は国会の議事録を読んで思った。故郷の風のつめたさを感じた」と澤地氏はその章の文をとじている。中村氏に心を寄せる澤地氏の無念の涙を行間に読み取れる思いである。生まれ故郷の日本での冷たい空気を感じ、第二の故郷となった異郷のアフガンに思いを寄せていく中村氏の心中はいかばかりであったろうか。

中村氏はいたるところで国際社会への貢献とか国際社会の協力というきれいな言葉に対して疑問を投げかけている。それは英米と歩調を合わせてアフガンへの破壊攻撃を行うことを意味するのか、そして協力することは殺人ほう助罪に値することではないか。米軍機の機銃掃射におびえながらも、用水路建設を図る中村氏達の立場から見れば、砂漠に水が引かれて農地になれば、アフガンの人々の心はやさしいものになっていく。これはアフガニスタン全体に対していえるのであり、こういうことこそ国連が主導権を取ってやるべきことではないか。世界は「国際的」という意味をとりちがえている、という主張を繰り返している。私も含めて多くの人々にとって西欧社会の考え方が中心となり、その方法でしか正義は実現されないと思っているのではないだろうか。とりわけ日本の自衛隊派遣が何

ももたらさず逆に対日感情悪化の引き金になる可能性を語っている。

この情報化社会にあってどうして一方的な知識に偏した判断をしてしまうのか。このことが一番私の心を悩ましたことであった。ここで思い出したのはかつてメディアリテラシーのテキスト作りで学んだ映画監督の森達也氏の言葉である。「僕の周りには世界がある。あなたの回りにもある。三百六十度すべてにある。でもカメラはまず、この無限の世界を四角いフレームの枠の中に限定する。その瞬間区切られたフレームの外の世界は存在しないことになってしまう。何かを撮るという行為は、何かを隠す行為と同じことなのだ」(『世界を信じるためのメソッド―僕らの時代のメディアリテラシー』理論社)。私たちはメディアを通して、気づかぬうちに切り取られた米英中心の意見を全てと思い、自分の意見として構築してしまう。立場を変えた側からの視点は捨象され、フレームの外の意見はないものとして思い込み、いつの間にか自分の信念へと変えてしまうのだ。リテラシーの意味の重要性を今回改めて知った思いである。

だが中村氏は一人ではなかった。彼は人生において十冊以上の出版物を著わし、よく読まれている。日本滞在中は各種の講演会に参加し、多くの出席者がその主張に耳を傾けている。そして支援するペシャワール会を通じて人々から得た二十億円近くの援助金を用水路建設に充てているのだ。また国連には大きな疑問を持ちつつも、国連難民高等弁務官であり、JICAの理事長だった緒方貞子氏とは親交を重ね、互いに連絡を取り合って励まし合っていた。また「天皇・皇后両陛下さえ耳を傾けられた」(『医者・用水路を拓く』石風社)と述べている。

中村氏が人生の総括のように考える「人として最後まで守り、尊ぶべきものはなにか」について考えたい。澤地氏の問いかけに各所で中村氏はその時その時に異なった発言をしている。一つには自然を大切にした生活の在り方であり、大自然の中の人間が偏狭な考えで争いを起こし殺し合うことの無意味さを訴えている。実証的に自らが行ってきた用水路による自然復活により、人々に豊かな日常をもたらした平和の大切さを学び取ることができる。他方においては若い頃学んだ論語の知識がキリスト教的考えに立っても、イスラムの過激思想家にも驚くほどよく理解してもらえるということだった。それは私たちの知識以前に事実というものがあり、その事実を感得するかどうかでその人の徳の高さがわかるということ、つまり論語の字句の中に示される徳目はイスラムの徳目であり、キリスト教の徳目でもある。過激なイスラム論者ほど氏の言うことをよくわかってくれるというのだ。かたくなに主義主張することから解き放たれて自由となり、大きな存在に身を任すことの大切さを主張されているように思われる。この他には家族、親族との血のつながりを感じ、友人、仲間の理解に感謝し、ひ弱な日本の若者が実践の中から成長していく姿に氏は目を

細めて喜んでいる。これらの項目は全て一つにつながっていく。それは「無類の人間好き」ということであり、国や宗教、政治的立場、老若男女の差を超えた人間肯定の姿ではないだろうか。そのことは澤地氏が考えたと思われるこの著書のタイトル『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』に凝集していると思われる。導かれるようにアフガニスタンに渡り、医療、用水路建設にまい進した中村哲医師の人生に教示されたものは大きい。